

# さいかち淵

宮沢賢治

青空文庫



八月十三日

さいかち淵なら、ほんたうにおもしろい。

しゅつこだつて毎日行く。しゅつこは、舜一なんだけれども、みんなはいつでもしゅつこといふ。さういはれても、しゅつこは少しも怒らない。だからみんなは、いつでもしゅつこしゅつこといふ。ぼくは、しゅつことは、いちばん仲がいい。けふもいつしよに、出かけて行つた。

ぼくらが、さいかち淵で泳いでみると、発破をかけに、大人も来るからおもしろい。今日のひるまもやつて来た。

石神の庄助がさきに立つて、そのあとから、煉瓦場の人たちが三人ばかり、肌ぬぎになつたり、網を持つたりして、河原のねむの木のところを、こつちへ来るから、ぼくは、きつと発破だとおもつた。しゅつこも、大きな白い石をもって、淵の上のさいかちの木にのぼつてゐたが、それを見ると、すぐに、石を淵に落して叫んだ。

「おゝ、発破だぞ。知らないふりしてろ。石とりやめて、早くみんな、下流へさがれ。」

そこでみんなは、なるべくそつちを見ないやうにしながら、いつしよに下流の方へ泳いだ。しゅっこは、木の上で手を額にあてて、もう一度よく見きはめてから、どぶんと逆まに淵へ飛びこんだ。それから水を潜つて、一ぺんにみんなへ追ひついた。

ぼくらは、淵の下流の、瀬になったところに立った。

「知らないふりして遊んでろ。みんな。」しゅっこが云つた。ぼくらは、砥石をひろつたり、せきれいを追つたりして、発破のことなぞ、すこしも気がつかないふりをしてゐた。

向ふの淵の岸では、庄助が、しばらくあちこち見まはしてから、いきなりあぐらをかいて、砂利の上へ座つてしまった。それからゆっくり、腰からたばこ入れをとつて、きせるをくはへて、ぱくぱく煙をふきだした。奇体だと思つてゐたら、また腹かけから、何か出した。

「発破だぞ、発破だぞ。」とペ吉やみんな叫んだ。しゅっこは、手をふつてそれをとめた。庄助は、きせるの火を、しづかにそれへうつした。うしろに居た一人は、すぐ水に入つて、網をかまへた。庄助は、まるで電車を運転するときのやうに落ちついて、立つて一あし水にはひると、すぐその持ったものを、さいかちの木の下のところへ投げこんだ。するとまもなく、ぼおといふやうなひどい音がして、水はむくつと盛りあがり、それからしばらく、

そこらあたりがきいんと鳴った。煉瓦場の人たちは、みんな水へ入った。

「さあ、流れて来るぞ。みんなとれ。」としゅつこが云った。まもなく、小指ぐらゐの茶いろなかじかが、横向きになつて流れて来たので、取らうとしたら、うしろのはうで三郎が、まるで瓜をすするときのような声を出した。六寸ぐらゐある鮎をとつて、顔をまつ赤にしてよろこんでゐたのだつた。

「だまつてろ、だまつてろ。」しゅつこが云った。

そのとき、向ふの白い河原を、肌ぬぎになつたり、シャツだけ着たりした大人や子どもらが、たくさんかけて来た。そのうしろからは、ちやうど活動写真のやうに、一人の網シヤツを着た人が、はだか馬に乗つて、まつしぐらに走つて来た。みんな発破の音を聞いて、見に来たのだ。

庄助は、しばらく腕を組んで、みんなのとるのを見てゐたが、

「さつぱり居ないな。」と云つた。けれども、あんなにとれたらたくさんだ。煉瓦場の人たちなんか、三十足ぐらゐもとつたんだから。ぼくらも、一疋か二疋なら誰だつて拾つた。庄助は、だまつて、また上流へ歩きだした。煉瓦場の人たちもついて行つた。網シヤツの人は、馬に乗つて、またかけて行つたし、子どもらは、ぼくらの仲間にはひらうと、岸に

座つて待つてゐた。

「発破かけたら、雑魚撒かせ。」三郎が、河原の砂つぱの上で、ぴよんぴよんはねながら、高く叫んだ。

ぼくらは、とつた魚を、石で囲んで、小さな生洲をこしらへて、生き返つても、もう遁げて行かないやうにして、また石取りをはじめた。ほんたうに暑くなって、ねむの木もぐつたり見えたり、空もまるで、底なしの淵のやうになつた。

そのころ誰かが、

「あ、生洲、打壊すよとだぞ。」と叫んだ。見ると、一人の変に鼻の尖つた、洋服を着て、わらぢをはいた人が、鉄砲でもない槍でもない、をかした長いものを、せなかにしよつて、手にはステッキみたいな鉄槌をもつて、ぼくらの魚を、ぐちやぐちや搔きまはしてゐるのだ。みんな怒つて、何か云はうとしてゐるうちに、その人は、びちやびちや岸をあるいて行つて、それから淵のすぐ上流の浅瀬をこつちへわたらうとした。ぼくらはみんな、さいかちの樹にのぼつて見てゐた。ところがその人は、すぐに河をわたるでもなく、いかにもわらぢや脚絆の汚なくなつたのを、そのまゝ洗ふといふふうに、もう何べんも行つたり来たりするもんだから、ぼくらはいいよ、気持ちが悪くなつてきた。そこで、たうと

う、しゅつこが云った。

「お、おれ先に叫ぶから、みんなあとから、一二三で叫ぶこだ。いいか。

あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生云ふでないか。一、二い、三。」

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生云ふでないか。」

その人は、びつくりしてこつちを見たけれども、何を云ったのか、よくわからないといふやうすだった。そこでぼくらはまた云った。

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生、云ふでないか。」

鼻の尖った人は、すばすばと、煙草を吸ふときのやうな口つきで云った。

「この水呑むのか、ここらでは。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生云ふでないか。」

鼻の尖った人は、少し困ったやうにして、また云った。

「川をあるいてわるいのか。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生云ふでないか。」

その人は、あわてたのをごまかすやうに、わざとゆっくり、川をわたって、それから、アルプスの探検みたいな姿勢をとりながら、青い粘土と赤砂利の崖をななめにのぼって、せなかにしよった長いものをぴかぴかさせながら、上の豆畠へはひってしまった。ぼくらも何だか気の毒なやうな、をかしながらんとした気持ちになった。そこで、一人づつ木からはね下りて、河原に泳ぎついて、魚を手拭につつんだり、手にもったりして、家に帰った。

八月十四日

しゅつこは、今日は、毒もみの丹礬をもつて来た。あのトラホームの眼のふちを擦る青い石だ。あれを五かけ、紙に包んで持ってきて、ぼくをさそった。巡査に押へられるよと云ったら、田から流れて来たと言へばいいと云った。けれども毒もみは卑怯だから、ぼく

は厭だと答へたら、しゅっこは少し顔いろを変へて、卑怯でないよ、みみずなんかで、だまして取るよりいゝと云つて、あとはあんまり、ぼくとは口を利かなかつた。その代りしゅっこは、そこら中を、一軒ごとにさそつて歩いて、いいことをして見せるからあつまれと云つて、まるで小さなこどもらまで、たくさん集めた。

ぼくらは、蟬が雨のやうに鳴いてゐるいつもの松林を通つて、それから、祭のときの瓦斯のやうな匂のむつとする、ねむの河原を急いで抜けて、いつものさいかち淵に行つた。今日なら、もうほんたうに立派な雲の峰が、東でむくむく盛りあがり、みみづくの頭の形をした鳥ヶ森も、ぎらぎら青く光つて見えた。しゅっこが、あんまり急いで行くもんだから、小さな子どもらは、追ひつくために、まるで半分馳けた。みんな急いで着物をぬいで、淵の岸に立つと、しゅっこが云つた。

「ちやんと一列にならべ。いいか。魚浮いて来たら、泳いで行つてとれ。とつた位与るぞ。いいか。」

小さなこどもらは、よろこんで顔を赤くして、押しあつたりしながら、ぞろつと淵を囲んだ。ペ吉だの三四人は、もう泳いで、さいかちの木の下まで行つて待つてゐた。

しゅっこが、大威張りで、あの青いたんぱんを、淵の中に投げ込んだ。それから、みん

なしいんとして、水を見つめて立つてゐた。ぼくは、からだの上流の方へ動いてゐるやうな気持ちになるのがいやなので、水を見ないで、向ふの雲の峰の上を通る黒い鳥を見てゐた。ところがそれからよほどたつても、魚は浮いて来なかつた。しゅっこは大へんまじめな顔で、きちんと立つて水を見てゐた。昨日発破をかけたときなら、もう十疋もとつてゐたんだと、ぼくは思った。またずるぶんしばらくみんなしいんとして待った。けれどもやつぱり、魚は一ぴきも浮いて来なかつた。

「さつぱり魚、浮ばないよ。」三郎が叫んだ。しゅっこはびくつとしたけれども、まだ一しんに水を見てゐた。

「魚さつぱり浮ばないよ。」ペ吉が、また向ふの木の下で云つた。するともう子どもらは、がやがや云ひ出して、みんな水に飛び込んでしまった。

しゅっこは、しばらくきまり悪さうに、しゃがんで水を見てゐたけれど、たうとう立つて、

「鬼っこしないか。」と云つた。

「する、する。」みんなは叫んで、じゃんけんをするために、水の中から手を出した。泳いでゐたものは、急いでせいこの立つところまで行つて手を出した。しゅっこが、ぼくにも

はひらないかと云つたから、もちろんぼくは、はじめから怒つてゐたのでもないし、すぐ手を出した。しゅっこは、はじめに、昨日あの変な鼻の尖つた人の上つて行つた崖の下の、青いぬるぬるした粘土のところを根っこにきめた。そこに取りついてゐれば、鬼は押へることができない。それから、はさみ無しの一人まけかちで、じゃんけんをした。ところが、悦治はひとりはさみを出したので、みんなにうんとはやされたほかに鬼になった。悦治は、唇を紫いろにして、河原を走つて、喜作を押へたもんだから、鬼は二人になった。それからぼくらは、砂つぱの上や淵を、あっちへ行つたり、こっちへ来たり、押へたり押へられたり、何べんも鬼つこをした。

しまひにたうとう、しゅっこ一人が鬼になった。しゅっこはまもなく吉郎をつかまへた。ぼくらはみんな、さいかちの木の下に居てそれを見てゐた。するとしゅっこが、吉郎、汝、上流から追つて来い、追へ、追へ、と云ひながら、自分はだまって立って見てゐた。吉郎は、口をあいて手をひろげて、上流から粘土の上を追つて来た。みんなは淵へ飛び込む仕度をした。ぼくは楊の木にのぼつた。そのとき吉郎が、たぶんあの上流の粘土が、足についてたためだらう、みんなの前ですべてころんでしまった。みんなは、わあわあ叫んで、吉郎をはねこえたり、水に入つたりして、上流の青い粘土の根に上つてしまった。

「しゅっこ、来。」三郎は立つて、口を大きくあいて、手をひろげて、しゅっこをばかにした。するとしゅっこは、さつきからよつぽど怒つてゐたと見えて、

「ようし、見てろ。」と云ひながら、本氣になつて、ぎぶんと水に飛び込んで、一生けん命、そつちの方へ泳いで行つた。子どもらは、すっかり恐がつてしまった。第一、その粘土のところはせまくて、みんながはひれなかつたし、それに大へんつるつるすべる傾斜になつてゐたものだから、下の方の四五人などは上の人につかまるやうにして、やつと川へすべり落ちるのをふせいでゐた。三郎だけが、いちばん上で落ち着いて、さあ、みんな、とか何とか相談らしいことをはじめた。みんなもそこで、頭をあつめて聞いてゐる。しゅっこは、ぼちやぼちや、もう近くまで行つてゐた。みんなは、ひそひそはなしてゐる。するとしゅっこは、いきなり両手で、みんなへ水をかけ出した。みんながばたばた防いでゐたら、だんだん粘土がすべつて来て、なんだかすこうし下へずれたやうになつた。しゅっこはよろこんで、いよいよ水をはねとばした。するとみんなは、ぼちゃんぼちゃんと一度に水にすべつて落ちた。しゅっこは、それを片っぱしからつかまへた。三郎ひとり、上をまはつて泳いで逃げたら、しゅっこはすぐに追ひ付いて、押へたほかに、腕をつかんで、四五へんぐるぐる引っぱりまはした。三郎は、水を呑んだと見えて、霧をふいて、ごぼご

ほむせて、泣くやうにしながら、

「おいらもうやめた。こんな鬼つこもうしない。」と云った。子どもらはみんな砂利に上つてしまった。三郎もあがつた。しゅっこは、そつと、あの青い石を投げたところをのぞきながら、さいかちの樹の下に立つてゐた。

ところが、そのときはもう、そらがいつぱいの黒い雲で、楊も変に白っぽくなり、蟬があがあ鳴いてゐて、そこらはなんとも云はれない、恐ろしい景色にかはつてゐた。

そのうちに、いきなり林の上のあたりで、雷が鳴り出した。と思ふと、まるで山つなみのやうな音がして、一ぺんに夕立がやつて来た。風までひゅうひゅう吹きだした。淵の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなつてしまった。河原にあがつた子どもらは、着物をかかへて、みんなねむの木の下へ遁げこんだ。ぼくも木からおりて、しゅっこといつしよに、向ふの河原へ泳ぎだした。そのとき、あのねむの木の方かどこか、烈しい雨のなかから、

「雨はざあざあ　ざっこざっこ、

風はしゅうしゅう　しゅっこしゅっこ。」

といふやうに叫んだものがあつた。しゅっこは、泳ぎながら、まるであわてて、何かに足

を引っぱられるやうにして遁げた。ぼくもじつきいこはかった。やうやく、みんなのゐるねむのはやしについたとき、しゅっこはがたがたふるへながら、

「いま叫んだのはおまへらだか。」ときいた。

「そでない、そでない。」みんなは一しよに叫んだ。ペ吉がまた一人出て来て、

「そでない。」と云った。しゅっこは、気味悪さうに川のはうを見た。けれどもぼくは、みんなが叫んだのだとおもふ。

# 青空文庫情報

底本：「新修 宮沢賢治全集 第10巻」筑摩書房

1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行

底本の親本：「校本宮澤賢治全集」筑摩書房

1973（昭和48）年5月～1977（昭和52）年10月初版発行

入力：田代信行

校正：伊藤時也

2000年4月15日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# さいかち淵

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>